TADOKU JUNIOR ラガディ・アン ★★★☆☆ ふつう 848語

Raggedy Ann and the Fairies' Gift

ラガディ・アンとようせいのおくりもの

Johnny Gruelle（1918年の本） 原文そのまま 朗読：Phil Chenevert

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ 真夜中、子ども部屋にふしぎな音楽と光。ようせいたちが、光る小さなつつみをはこんできました。中に入っていたのは……？

All the dolls were tucked snugly in their little doll-beds for the night and the large house was very still.

Every once in a while Fido would raise one ear and partly open one eye, for his keen dog sense seemed to tell him that something was about to happen.



Finally he opened both eyes, sniffed into the air and, getting out of his basket and shaking himself, he trotted across the nursery to Raggedy Ann's bed.

Fido put his cold nose in Raggedy Ann's neck. She raised her head from the little pillow.

"Oh! It's you, Fido!" said Raggedy Ann. "I dreamed the tin soldier put an icicle down my neck!"

"I can't sleep," Fido told Raggedy Ann. "I feel that something is about to happen!"

"You have been eating too many bones lately, Fido, and they keep you awake," Raggedy replied.

"No, it isn't that. I haven't had any bones since the folks had beef last Sunday. It isn't that. Listen, Raggedy!"

Raggedy Ann listened.

There was a murmur as if someone were singing, far away.

"What is it?" asked Fido.

"Sh!" cautioned Raggedy Ann, "It's music."

It was indeed music, the most beautiful music Raggedy Ann had ever heard.

It grew louder, but still seemed to be far away.

Raggedy Ann and Fido could hear it distinctly and it sounded as if hundreds of voices were singing in unison.

"Please don't howl, Fido," Raggedy Ann said as she put her two rag arms around the dog's nose. Fido usually "sang" when he heard music.

But Fido did not sing this time; he was filled with wonder. It seemed as if something very nice was going to happen.



Raggedy Ann sat upright in bed. The room was flooded with a strange, beautiful light and the music came floating in through the nursery window.

Raggedy Ann hopped from her bed and ran across the floor, trailing the bed clothes behind her. Fido followed close behind and together they looked out the window across the flower garden.

There among the flowers were hundreds of tiny beings, some playing on tiny reed instruments and flower horns, while others sang. This was the strange, wonderful music Raggedy and Fido had heard.

"It's the Fairies!" said Raggedy Ann. "To your basket quick, Fido! They are coming this way!" And Raggedy Ann ran back to her bed, with the bed clothes trailing behind her.

Fido gave three jumps and he was in his basket, pretending he was sound asleep, but one little black eye was peeping through a chink in the side.

Raggedy jumped into her bed and pulled the covers to her chin, but lay so that her shoe-button eyes could see towards the window.

Little Fairy forms radiant as silver came flitting into the nursery, singing in far away voices. They carried a little bundle. A beautiful light came from this bundle, and to Raggedy Ann and Fido it seemed like sunshine and moonshine mixed. It was a soft mellow light, just the sort of light you would expect to accompany Fairy Folk.

As Raggedy watched, her candy heart went pitty-pat against her cotton stuffing, for she saw a tiny pink foot sticking out of the bundle of light.

The Fairy troop sailed across the nursery and through the door with their bundle and Raggedy Ann and Fido listened to their far away music as they went down the hall.

Presently the Fairies returned without the bundle and disappeared through the nursery window.

Raggedy Ann and Fido again ran to the window and saw the Fairy troop dancing among the flowers.

The light from the bundle still hung about the nursery and a strange lovely perfume floated about.

When the Fairies' music ceased and they had flown away, Raggedy Ann and Fido returned to Raggedy's bed to think it all out.

When old Mister Sun peeped over the garden wall and into the nursery, and the other dolls awakened, Raggedy Ann and Fido were still puzzled.

"What is it, Raggedy Ann?" asked the tin soldier and Uncle Clem, in one voice.

Before Raggedy Ann could answer, Marcella came running into the nursery, gathered up all the dolls in her arms, and ran down the hall, Fido jumping beside her and barking shrilly.

"Be quiet!" Marcella said to Fido, "It's asleep and you might awaken it!"



Mamma helped Marcella arrange all the dolls in a circle around the bed so that they could all see what was in the bundle.

Mamma gently pulled back the soft covering and the dolls saw a tiny little fist as pink as coral, a soft little face with a cunning tiny pink nose, and a little head as bald as the French dolly's when her hair came off.

My, how the dollies all chattered when they were once again left alone in the nursery!

"A dear cuddly baby brother for Mistress!" said Uncle Clem.

"A beautiful bundle of love and Fairy Sunshine for everybody in the house!" said Raggedy Ann, as she went to the toy piano and joyously played "Peter-Peter-Pumpkin-Eater" with one rag hand.



人形たちはみんな、小さな人形のベッドにぬくぬくとねかされ、大きな家はとてもしずかでした。

ときどきフィドは、かた方の耳を立てて、かた方の目を少しあけました。犬のするどいかんが、何かがおこりそうだと教えているようでした。

とうとうフィドは両方の目をあけ、くんくんと空気のにおいをかぐと、かごから出て体をぶるっとふるわせ、子ども部屋をよこぎって、ラガディ・アンのベッドへとことこ歩いていきました。

フィドは、つめたい鼻をラガディ・アンの首におしつけました。ラガディ・アンは、小さなまくらから頭をあげました。

「あら！フィド、あなただったの！」とラガディ・アンは言いました。「ブリキのへいたいが、わたしの首につららを入れたゆめを見ていたわ！」

「ねむれないんだ」とフィドはラガディ・アンに言いました。「何かがおこりそうな気がするんだよ！」

「このごろ、ほねを食べすぎているのよ、フィド。それでねむれないんだわ」とラガディは答えました。

「ちがうよ、そうじゃないんだ。この前の日曜日に家の人たちが牛肉を食べてから、ほねは一本も食べていないもの。そうじゃないんだよ。聞いて、ラガディ！」

ラガディ・アンは耳をすませました。

遠くでだれかが歌っているような、かすかな声が聞こえました。

「何だろう？」とフィドがたずねました。

「シーッ！」とラガディ・アンは注意しました。「音楽よ」

それはほんとうに音楽でした。ラガディ・アンが今までに聞いた中で、いちばん美しい音楽でした。

音楽は大きくなってきましたが、それでもまだ遠くから聞こえるようでした。

ラガディ・アンとフィドにはそれがはっきりと聞こえ、何百もの声が、声をそろえて歌っているように聞こえました。

「おねがいだから、とおぼえしないでね、フィド」とラガディ・アンは言って、ぬのの両うでで犬の鼻をかかえました。フィドは、音楽を聞くといつも「歌う」のです。

でも、こんどはフィドは歌いませんでした。ふしぎな気持ちでいっぱいだったのです。何かとてもすてきなことがおこりそうな気がしました。

ラガディ・アンはベッドの上で、しゃんと体をおこしました。部屋はふしぎな美しい光でいっぱいになり、音楽が子ども部屋のまどからただよってきました。

ラガディ・アンはベッドからとびおりて、ふとんを引きずりながらゆかを走っていきました。フィドもすぐうしろからついていき、いっしょにまどから花畑のほうを見わたしました。

花のあいだに、何百もの小さな小さなものたちがいました。小さなあしのふえや花のラッパをふいているものもいれば、歌っているものもいました。これが、ラガディとフィドが聞いた、ふしぎですばらしい音楽だったのです。

「ようせいたちだわ！」とラガディ・アンが言いました。「早くかごにもどって、フィド！こっちへ来るわ！」そしてラガディ・アンは、ふとんを引きずりながら、ベッドへかけもどりました。

フィドは三回ぴょんととんでかごにもどり、ぐっすりねむっているふりをしましたが、小さな黒い目が一つ、かごの横のすきまからのぞいていました。

ラガディはベッドにとびこんで、ふとんをあごまで引き上げましたが、くつボタンの目でまどのほうが見えるように横になりました。

銀のようにかがやく小さなようせいたちのすがたが、遠くからひびくような声で歌いながら、ひらひらと子ども部屋に入ってきました。ようせいたちは、小さなつつみをはこんでいました。そのつつみからは美しい光が出ていて、ラガディ・アンとフィドには、お日さまの光と月の光がまざったように見えました。それはやわらかくておだやかな光で、ようせいたちといっしょにやってくるのにぴったりの光でした。

見ているうちに、ラガディのキャンディーのハートは、わたのつめ物にあたってドキドキしました。光のつつみから、小さなピンク色の足が出ているのが見えたのです。

ようせいの一行はつつみをもって子ども部屋をすうっとよこぎり、ドアから出ていきました。ラガディ・アンとフィドは、ようせいたちがろうかを進んでいくあいだ、その遠い音楽に耳をすませていました。

やがてようせいたちは、つつみをもたずにもどってきて、子ども部屋のまどから見えなくなりました。

ラガディ・アンとフィドはまたまどへかけよって、ようせいの一行が花のあいだでおどっているのを見ました。

つつみの光はまだ子ども部屋にのこっていて、ふしぎなよいかおりがただよっていました。

ようせいたちの音楽がやんで、ようせいたちがとびさってしまうと、ラガディ・アンとフィドはラガディのベッドにもどって、よく考えてみることにしました。

お日さまおじさんが庭のへいの上から子ども部屋をのぞき、ほかの人形たちが目をさましたときにも、ラガディ・アンとフィドはまだ首をかしげていました。

「どうしたの、ラガディ・アン？」とブリキのへいたいとクレムおじさんが声をそろえてたずねました。

ラガディ・アンが答えるより前に、マーセラが子ども部屋にかけこんできて、人形たちをみんなうでにかかえ、ろうかをかけていきました。フィドもそばをとびはねながら、かん高い声でほえました。

「しずかにして！」とマーセラはフィドに言いました。「ねむっているんだから、おこしちゃうかもしれないでしょ！」

ママはマーセラを手つだって、人形たちみんなを、ベッドのまわりに丸くならべました。みんなが、つつみの中に何が入っているか見られるようにです。

ママがやわらかいおくるみをそっとめくると、人形たちに見えたのは、サンゴのようにピンク色の小さな小さなにぎりこぶし、かわいい小さなピンクの鼻のあるやわらかな顔、そして、かみの毛がとれたときのフランス人形の頭みたいにつるつるの小さな頭でした。

まあ、また子ども部屋で人形たちだけになったとき、みんなはなんてにぎやかにおしゃべりしたことでしょう！

「ご主人さまに、かわいい赤ちゃんの弟ができたんだね！」とクレムおじさんが言いました。

「家じゅうのみんなにとどいた、やさしい気持ちとようせいのお日さまがつまった、すてきなつつみよ！」とラガディ・アンは言って、おもちゃのピアノのところへ行き、ぬのの手で、うれしそうに『ピーター・ピーター・パンプキン・イーター』をかた手でひきました。

たんご と クイズ　ラガディ・アンとようせいのおくりもの

pillow まくら	**icicle** つらら	**bones** ほね
window まど	**flowers** 花	**bundle** つつみ
baby 赤ちゃん	**piano** ピアノ	

Q1 夜中にフィドがラガディ・アンをおこしたのはどうして？

① おなかがすいたから　② 何かがおこりそうな気がしたから　③ こわいゆめを見たから

Q2 ようせいたちのつつみから見えたものは？

① 金色のかんむり　② 小さな子ネコのしっぽ　③ 小さなピンク色の足

Q3 つつみの中にいたのは？

① 赤ちゃんの弟　② 新しい人形　③ 子犬

こたえ

Q1 ②　フィドは、何かがおこりそうな気がしてねむれなかったのです。ほねの食べすぎではありませんでした。

Q2 ③　光のつつみから、小さなピンク色の足が出ているのが見えて、ラガディのハートはドキドキしました。

Q3 ①　つつみの中にいたのは、マーセラのかわいい赤ちゃんの弟でした。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #18190（Johnny Gruelle、1918年）。パブリックドメイン。
挿絵：Johnny Gruelle（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Phil Chenevert（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。